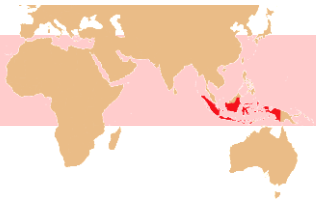
JETRO
2013年7月

インドネシア
BOP層実態調査レポート



相互扶助によるコミュニティ活動

インドネシアのコミュニティ

インドネシアのBOP層の多くが暮らすコミュニティとはどのようなものか。そこで行われている「町内会」的活動は、どのように行われているのか。

インドネシアにおけるコミュニティは、自然村的なものと行政的に作られたものの二つがあるが、いずれにおいても、RT（エル・テー）という名で呼ばれ、国家行政機構の末端に位置づけられている。いわば、日本でいうところの町内会に当たるものである。農村部では、集落を表すKampung（カンポン）という名で呼ばれるところもあるが、おおよそ、1つのコミュニティ当たり100世帯程度で構成されている。

これらのRT（町内会）がいくつかまとまって、RW（エル・ウェー）と呼ばれる町内会連合体が構成される。そして、複数のRW（町内会連合体）がまとまって、Desa（村）またはKelurahan（区）が構成される。Desa（村）は、住民が選出する村長による自治が行われるのに対して、Kelurahan（区）は、その上位の県・市政府から任命された区長によって治められる出先機関としての役割を持つ。Desa（村）については、その一つ下位にDusunと呼ばれる区域を配する場合もある。

インドネシア政府が政策や情報などを伝達したり、コミュニティ開発資金を流したりするような場合には、このルートを使うことで、RT（町内会）を通じて末端住民まで到達することになる。

ゴトン・ロヨン（相互扶助）

コミュニティの公衆トイレ兼洗濯場

インドネシアでは、「ゴトン・ロヨン」という名前のコミュニティにおける相互扶助活動が知られる。狭いコミュニティの中で、そこに属する成員どうしが助け合うという意味であるが、同時に、助け合わなければ、コミニティが成り立っていかないという事情もある。また、同時に、コミュニティの成員として果たさなければならない義務を行うよう、緩やかに強制されるという側面もある。

コミュニティ・レベルでは、様々な活動が行われる。たとえば、清掃・美化活動、シスカムリンと呼ばれる自警団への参加、乳幼児の定期健診・予防接種、公衆トイレ兼洗濯場の建設、選挙公報、奨学金やコミュニティ開発資金の紹介などである。

コミュニティの成員の冠婚葬祭や子供の割礼のお祝いなども、コミュニティ全体で行う場合が多い。清掃・美化活動や自警団などへは、通常、コミュニティ成員は、当番制または輪番制で、必ず参加しなければならない。しかしながら、最近では、一定額の資金を支払うことで、これらの活動への参加義務が免除される場合もあるようである。

コミュニティにおける清掃活動、自警団、その他活動の費用は、コミュニティに属している人々が毎月支払う会費などから賄われるのが一般的である。筆者が現在属しているスラバヤの町内会では、1ヵ月に5万ルピア支払っているが、いわゆるBOP層に属する一般家庭は1万ルピア程度で、成員の所得状況によって負担する額は異なる。

1年に1回の帰省資金を積み立てているゴトン・ロヨンもあり、ある長屋では毎月5万～10万ルピアを積み立てていた。またその長屋では、町内会費5,000ルピアとゴミ処理代7,000ルピアを徴収され、町内教会の信者が亡くなった際は1万ルピアを拠出していた。

ゴトン・ロヨンといえば、一般にコミュニティ成員間の美しい相互の助け合いのような印象を与えているが、実際には、それを果たさないと他のコミュニティ成員から白い目で見られ、最悪の場合には「村八分」に遭うこともある。その意味で、コミュニティの成員として、義務を果たさなければならないという側面も併せ持つことになる。コミュニティ内の他人がみなそれを行っている以上、自分だけがそれを免れることはできない、という意味での緩やかな強制である。

Copy rights(C) 2014 JETRO. All rights reserved.

ジンピタン（Jimpitan）

ジンピタンで家の軒先に置かれた米

コミュニティの活動を支える資金は、成員が支払う会費だけが原資とは限らない。起業家精神に富んだコミュニティでは、公営企業を設立することも可能だが、その数は極めて少ない。他方、場所によっては、いわゆるBOP層に属する成員が会費を十分に支払えないところもある。そうしたところでは、コミュニティの活動を支えるために、会費以外の別な方法で資金を作り出す場合もある。

一例として挙げるのは、ジャカルタ首都特別州南ジャカルタ市クマン郡ペラ・マンパン区のジンピタン（jimpitan）である。ここに住むジュンピさんが説明してくれた。この町内会では、各家の軒先に米を入れるカップがつり下げられている。この米は集められて資金に換えられる。

当初、この仕組みは、町内会の警備・夜警をする人向けに想定されていた。すなわち、警備や夜警をしてくれる人は、昼間は肉体労働で働いており、その労をねぎらう意味で、お米を分けたり、お米を売って換えたお金を使ってもらったりするように考えられていた。しかし、傍目にはコミュニティの雰囲気で満ちあふれているこの町内会においても、そういった人々による警備や夜警が機能しなくなっていた。このため、やむを得ず、町内会の男たちが当番で警備や夜警をすることになる。彼らは、警備や夜警をするときに、軒先につり下げられた米を回収して歩く。だから、軒先にまだ米が残っているということは、当番の住民が警備や夜警をしなかったことを意味する。

各家庭から出される米は1日にスプーンで2さじ、それでも町内会全体だと1日に2キロぐらいになる。すなわち、1ヵ月で約60キロの米が集められる。1キロ当たりの米の値段は約7000ルピアなので、約42万ルピアの資金ができる。これらの一部は町内会の貧しい家庭に配られるほか、残りは街灯を直したり、警備用の詰め所をきれいにしたり、緑化活動に使ったりしている。

ちょっとみると、このジンピタンは長年伝統的に行われてきたコミュニティの知恵のように見える。しかし、よくよく聞いてみると、どうもそうではないのである。このジンピタンを考案したのは、実は、説明してくれたジュンピさんご自身で、2012年11月頃から始めたということである。ジュンピさんが知る限り、ほかの町内会ではやっていないそうである。たしかに、2012年2月に、この場所を訪れたときには、ジンピタンはなかった。

このように、各家庭で1日にスプーン2さじの米、というさほど大きな負担をかけず、しかもお金ではなく米を使って、町内会の活動用のささやかな資金を生み出しているのである。

ジンピタンのように、コミュニティ成員に負担を感じさせずに資金を生み出すようなやり方は、各コミュニティで様々に生み出されているものと考えられる。資金がコンスタントに集まるようになり、それなりの資金規模が維持されるようになれば、コミュニティ成員のなかで資金の貸し借りが可能なファンドの役割を果たせるようになる。インドネシア語で「シンパン・ピンジャム」（Simpan Pinjam）と呼ばれる信用組合的なものに発展させることができるようになる。実際、そのような形で、コミュニティの活動以外に、シンパン・ピンジャムの機能を併せ持つ形で拡張したケースは色々あるようである。

BOPビジネスへの示唆

BOPビジネスの観点でいえば、こうしたBOP層の暮らすコミュニティでの活動原理を理解することで、BOPビジネスのニーズをどのように把握するかという面や、BOP層に属する個々人を対象としたビジネス以外に、コミュニティを単位としたビジネスへのアプローチを考える視点などが得られるだろう。そして、その先には、コミュニティ向けのマイクロファイナンスの可能性も開けてくる。

BOPビジネスを形成する際にも、こうした知恵が生かされる方策を考えてみる必要があるだろう。

JETRO

【免責事項】本レポートで提供している情報は、ご利用される方のご判断・責任においてご使用ください。ジェトロでは、できるだけ正確な情報の提供を心掛けておりますが、本レポートで提供した内容に関連して、ご利用される方が不利益等を被る事態が生じたとしても、ジェトロ及び執筆者は一切の責任を負いかねますので、ご了承ください。

Copy rights(C) 2014 JETRO. All rights reserved.